



『大鏡』研究—文人貴族の歴史認識をめぐって—

中瀬, 将志

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2016-03-25

(Date of Publication)

2017-03-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第6604号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006604>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文内容の要旨

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

『大鏡』研究——文人貴族の歴史認識をめぐって——

氏名： 中瀬 将志

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程文化構造専攻

指導教員氏名 (主) 福長 進 教授

(副) 市澤 哲 教授

(副) 樋口 大祐 教授

(注) 4, 000字程度 (日本語による)。必ずページを付けること。

本論文は、平安時代の歴史叙述『大鏡』を対象として、その成立環境および内的論理の解明を試みたものであり、本研究の意義と問題の所在を述べた序章、本論文における議論の総括を行った終章と、第一～第六章の各論とから成る。以下に第一～第六章の要旨を記す。

第一章「道長の人物造型——「才」との関係をめぐる——」

『大鏡』道長伝に見える、道長の詩歌の才を高く評価する言説が、『大鏡』の道長造型にどのような意味をもたらしたかについて考察する。

学問・文芸の能力をあらわす「才」は、『大鏡』において政治的敗北者のイメージと強く結びつくものであり、そのため道長の「才」が直接評価されることはない。しかし『大鏡』の道長像には、詩歌の詠まれる場を宰領する文化興隆者としての性格が付与されており、たとえばそれは公任・伊周といった「才」ある人物との交流を通して表象されている。他方、『大鏡』に載る道長詠に目を向けると、いずれも技巧を凝らした和歌というよりは、率直な詠みぶりで慶事に興を添えるものとして評価がなされており、『大鏡』が一般的な秀作の基準を超越するところに、道長の和歌を位置づけていることが窺える。とりわけ、禎子内親王の産養において道長が詠んだとされる和歌は、道長の詩歌の才を、『大鏡』の見据える禎子内親王の栄華と結びつけたものとして重視される。

『大鏡』は、従来指摘されるような「魂」の強さのみならず、「才」の点からも道長の栄華の由来を説くのであった。かかる『大鏡』の道長造型からは、自邸において頻繁に作文会を催し、宴飲の際の和歌興を愛好するといった、道長の文化人としての側面に対する強い関心が窺える。道長が同時代の文化を領導したことは、『大鏡』の道長造型に少なからず影響を及ぼしていたのである。

第二章「道真関連記事の検討——文人貴族の天神信仰を視座として——」

『大鏡』時平伝の大半を占める菅原道真関連記事の生成の背景および、『大鏡』における道真造型の方法について、他史料との比較を通して考察する。

『北野天神縁起』には全体を通して道真の詩歌が多く引かれており、『大鏡』の行文に近いものを感じさせる。『大鏡』・『縁起』に共通する原資料の存在が想定できようが、両書の叙述には構成・内容の面で相違も見られる。語り手大宅世次が大学寮とのつながりを強調する点に、『大鏡』の特徴の一つが認められ、『大鏡』作者が道真について記すとき、文人貴族の間で共有されていた伝承を取り込んでいたことが窺える。

『大鏡』は、忠平流・時平流の浮沈を決定づける要因として道真の怨霊について語る一方で、忠平、あるいはその先にある道長の栄華とは無縁な、優れた漢詩文作者として、あるいは道理を重んじる賢臣としての道真像を描いている。かかる記事群の生成の背景には、文人貴族のものした漢詩文に見られるような、道真的文化的・政治的資質に対する崇敬の念があったと考えられる。道真の霊の、天皇家に対する攻撃性が、『縁起』ほど露骨に見られないのも、『大鏡』作者の抱く理想的臣下としての道真的イメージにそぐわないためであろう。『大鏡』の叙述は文人貴族に通用の思考様式と不可分の関係にあり、道真関連記事はかかる『大鏡』の特徴が最も顕著にあらわれた箇所と見做される。

第三章「花山院・花山朝の位置づけ (一) ——儒者弁の歴史認識——」

『大鏡』における花山院の人物造型および、花山朝の政治を支えたとされる藤原義懐・惟成の位置づけを考えることを通して、『大鏡』の花山院ならびに花山朝に対する評価が、いかなる歴史認識に支えられたものであるかを論じる。

『大鏡』は花山院の「狂ひ」を強調する一方で、院の歌才や「風流者」としての面を讃え、花山院が「才」を有する人物であることを印象づけている。ただし、『大鏡』における「才」は政治的敗北者のイメージと不可分の関係にあり、兼家・道兼らに「賤し下」された花山院もまた、そうした負性を抱え込む存在であった。御代ごとの諸芸風流譚を中心に構成された昔物語に花山院が登場しないことを勘案すると、『大鏡』において花山院が、優れた文化人としての資性、すなわち「才」を有する反面、貴族層からの支持を得ることができなかつたため聖代の現出とは程遠い帝として描かれていることが窺える。

そうした中、花山院を支えたのが、院の外舅義懐と東宮学士を務めた惟成であった。義懐は優れた「御心魂」の持ち主であることがいわれ、執政者としての資質が讃えられている。また惟成は、「文盲」と呼ばれる義懐を、実務の面で補佐した人物として位置づけられている。二人が担った花山朝の政治は、その内実こそ語られないものの、「いみじかりし」と称されており、『大鏡』が「道長至上主義」には収まりきらない部分を抱えた歴史叙述であることを示している。花山朝の政治を高く評価する言説は、院政期の文人貴族、大江匡房の著述にも見られ、『大鏡』の叙述の背景を考える上で示唆に富む。惟成と匡房の間には、「儒者弁」（大学寮紀伝道出身の弁官）という共通点があり、匡房の花山朝評価は、自身と立場を同じくする惟成の存在を強く意識したものであったと考えられる。匡房と同様、惟成を重視する『大鏡』の叙述にもまた、「儒者弁」の史観のあらわれを認めることができるのである。

第四章「花山院・花山朝の位置づけ（二）——「王威」をめぐる——」

『大鏡』が花山院をどのように位置づけているかを一層明らかにすべく、前章において触れる余裕のなかつた、花山院関連逸話に見える「王威」の意義について考察する。

『大鏡』における「王威」の用例は全三例。いずれも「王威」の強さを称揚するものであり、それぞれ、①清涼殿への落雷を鎮め、②承平・天慶の乱を平定し、③花山院の御所の門前を通過しようとする藤原隆家を退けた要因として語られる。①②は醍醐・朱雀天皇の御代の出来事であり、臣下が「王威」を借りて様々な災厄に対処する、という基本構造が指摘できるのであるが、冷泉天皇の登場を契機として、臣下はむしろ天皇の庇護者へとその役割を転換させていくのであった。道長の外孫である敦成親王・敦良親王の存在を疎ましく思っていた伊周が、道長自身の「威」によって死後怨霊とならなかつたとする『大鏡』の語りからは、藤氏大臣の「王威」に対する依存から自立へという史的過程が看取される。

他方、「王威」が語られない冷泉天皇以降の天皇にあって、唯一関連逸話の中に「王威」への言及が見られる花山院は特異な存在として注目される。前章で参照した大江匡房の『統本朝往生伝』でも、間接的にはあるものの花山朝における「皇威」の強さがいわれており、両書の叙述の基層となる歴史認識に、一定程度重なりを認めることができる。花山院の「狂ひ」を強調する一方で、花山院・隆家の「あらがひ事」の逸話に「王威」という要素を付加する点に、『大鏡』における花山院評価の複雑さがあるといえようが、こうした複雑さは、「道長至上主義」に規制された花山院評と、『統本朝往生伝』に示されるような、後三条朝聖代史観を背景とした花山院評とが、未整理なままで打ち出されていることに起因すると考えられる。『大鏡』の、花山院をめぐる言説からは、両立することのない二つの歴史認識の相剋が看取されるのである。

第五章「源氏の栄え」について——「三条院の御末」へのまなざし——」

『大鏡』道長伝に見える源氏繁栄の予言が、いかなる内実・意義を有するかについて考察する。従来、十一世紀後半における源氏（宇多・醍醐・村上源氏）、とりわけ村上源氏の公卿の台頭を予示するものと

解釈されてきた「源氏の栄え」であるが、『大鏡』の叙述には、村上源氏と、村上源氏の繁栄の基盤となった御堂流嫡流とのつながりが示されておらず、「源氏の栄え」を、村上源氏の繁栄を予示するものとしてのみ理解することには慎重でなければならないと考える。

とはいえ、『大鏡』における「栄え（ゆ）」は、天皇の外祖父・外舅や、祖母・母に対する讃辞としての性格が強いため、「源氏の栄え」が宇多・醍醐源氏の台頭を予示しているとも考え難い。天皇との外戚関係ということであれば村上源氏の存在が再浮上してくるけれども、『大鏡』は「源氏の栄え」を予示する一方で、道長の「栄え」が「外ざま」へ分かれることはないのだともいう（道長伝）。他方、世次は天皇の母后の地位が「藤氏」から「源氏」へと移っていくことを確かに見据えており、道長伝における倫子評や、昔物語に見える倫子・彰子の春日詣の逸話はそのあらわれと見られる。『大鏡』の叙述からは、倫子・彰子・禎子内親王という、道長を中心とした三代にわたる（世の親）の系譜が見出せるのであり、源氏繁栄の予言も、倫子の「栄え」が禎子へと発展的に継承されていくことを示すものと考えられる。

後三条天皇母禎子内親王、さらに実仁親王母源基子は、敦明親王の東宮退位によって断絶した三条系皇統の流れを引く女性であり、天皇との間に子を儲けることでその血を皇統に統合した。『大鏡』はかかる出自をもつ後三条天皇・実仁親王の正統性を補強すべく、禎子・基子の「栄え」を予祝するとともに、彼女らと道長のつながりを語ることで道長繁栄の永続性をも説くのであった。

第六章「東宮退位の記憶——『大鏡』の成立環境を考えるために——」

三条天皇皇子敦明親王の東宮退位事件に対する『大鏡』の関心の強さが、いかなる背景を有するかについて、『大鏡』が禎子内親王・後三条天皇重視の歴史叙述であるということとかわらせながら検討を加える。

敦明親王と尊仁親王（後三条天皇）は、ともに有力な後見をもたない、立場の不安定な東宮であった。しかし、敦明親王が、外孫敦良親王（後朱雀天皇）の立場を望む道長の圧力によって東宮退位を決意したとされるのに対し、尊仁親王の東宮時代、親王にとって代わる存在はなかつた。禎子内親王・後三条天皇と頼通の関係は決して良好ではなかつたが、後三条天皇の御代には、東宮貞仁親王（白河天皇）に頼通男師実の養女賢子が参入し、白河天皇と師実は密接な関係を築くこととなる。それは同時に、白河朝の東宮実仁親王（白河天皇の異母弟）の立場を微妙なものにすることとなったであろう。師実家とは疎遠な実仁親王を庇護したのが、祖母禎子内親王であり、かつて尊仁親王にも仕えた東宮坊の官人（能長・資仲ら）であった。古記録の記述からは、実仁親王方が師実家との姻戚関係を構築することを志向していたことも知られる。

先学の指摘するように、『大鏡』の成立時期を白河朝頃と見定めることができるのであれば、『大鏡』作者にとって、かつて敦明親王の置かれた境遇は、現在の実仁親王のそれと重なって見えたはずである。実仁親王の母源基子が敦明親王の孫娘であるということも重要であろう。敦明親王東宮退位事件が『大鏡』において大きく取り上げられていることは、『大鏡』の編述に実仁親王周辺の官人が関与したことを示していよう。

論文審査の結果の要旨

氏 名	中 瀬 将 志
論 文 題 目	『大鏡』研究——文人貴族の歴史認識をめぐって——
要 旨	
<p>本学位申請論文は、第六章立ての本論に、これまでの『大鏡』の作者に関する議論を要領よく整理した序章と第六章の補論ともいうべき終章を加えた構成になっている。第一章から第四章の眼目は、『大鏡』の歴史叙述に文人貴族のものの見方がどのように反映しているかを、道長の人物造型・菅原道真関連の記事群の位置づけ・花山院の造型および花山朝に対する評価について検討を加えながら、検証することにある。第五章と第六章は、『大鏡』の成立環境、とくに政治的状況について丁寧に分析を加えて、『大鏡』の歴史編述がいかなる目的でなされたか、ひいてはその担い手はどのような人物であったかを明らかにするものである。本論文は、作者に関する先学の議論から始まり、文人貴族的な歴史の見方をあぶり出し、ついで『大鏡』の成立事情を照らし出す手順をふんで、すでに加藤静子氏が『大鏡』の作者の最有力候補として指摘している、文人貴族と称するにふさわしい経歴と事績を有する、藤原実政を因らざるも浮上させる結論に至っている。一見すると、旧態依然の作者論の枠にとどまっている印象を与えかねないが、かかる結論に至る過程は、細緻で多面的なテキスト読みを支えとして議論を何段階にもわたって高次元レベルへ引き上げて論理化する、何々論とは命名しがたい秀逸な『大鏡』研究の成果である。本論文は、作者を特定する作業ではなく、作者探しを通して達成された『大鏡』の豊かな読みの提示である。以下、各章の概要を記す。</p> <p>第一章は、道長の造型に着目して、そこに文人貴族的なものの見方の介在を見出そうとするものである。『大鏡』の大臣列伝は、道長に至る藤原北家主流に位置する人物の造型においては「魂」が評価され、一方、非主流に位置づけられる人物の造型のひとつに、「才」が称揚されるパターンがある。ところが、道長は、主流であるにもかかわらず、「魂」とともに「才」の持ち主と位置づけられている。従前、「魂」と「才」を兼備する道長の造型は、その卓越性を証示するもののひとつとしてとらえられてきたが、非主流の「才」と道長造型に見られる「才」は本質的に異なることを明らかにし、道長のそれは、道長の栄華の内実と密接にかかわり、文化興隆者としての一面を強調するものであったとする。かかる一面を称揚するところに、政務に通暁した文章道出身者、いわゆる文人貴族的なものの見方が確認されると結論づけている。</p> <p>第二章は、時平伝の過半を占める、菅原道真関連の記事群に着目して、伏在する藤原北家主流間の陰湿な権力闘争をも表現の背後に見据えつつ、伝の論理に基づく記事群の導入の必然的な理由にも検討を加える一方、『北野天神縁起』などの他資料と比較して『大鏡』の道真造型の偏差を踏まえつつ、肥大化した記事群に道真を「風月本主」「賢臣」のイメージでもって造型する志向性を確認して、そこに文人貴族の好尚や倫理観が色濃く投影していることを明らかにしている。</p> <p>第三章・第四章は、花山院に関する記事、あるいは花山院造型、および花山朝に対する評価、さらには花山院にかかわって特徴的に使われる「王威」という語句にこだわって、第一・二章と同様、文人貴族的な歴史観やものの考え方の投影をこまやかに論じている。天皇紀では藤原北家の繁栄の犠牲者、悲劇の帝王として造型される花山院が、大臣列伝の伊尹伝においては、異なった相貌の持ち主として描かれている。『大鏡』のそれぞれの伝や紀は、道長至上主義の歴史を実現するために、パターン化された伝の論理のもとに、立伝された人物やその系譜に連なる人物の逸話が配されていることは、つとに指摘されている。したがって、伝の論理の縛りを受けながら個々の記事（逸話）は定着することとなるが、同じ人物の逸話であっても、別の紀や伝に位置づけられると、異なる論理の規制を受け、ひい</p>	
主査記載 氏名・印	福 長 進

ては人物評価が変わり、『大鏡』の描く人物は統一した像を結ばないこととなる。二つの伝・紀にまたがってその人物像が定着している人物のひとつが花山院であった。「才」を評価する伊尹伝の花山院造型には、帝王像とはかけ離れた当人の光彩を放つ逸話が取用されるとともに、伝の論理を具現するコンテクストに支えられて花山朝の賢臣、藤原惟成までも射止め、ひいては花山朝を聖代と位置づけ、道長至上主義に規制された花山院紀とは異なる評定を生んでいることを指摘し、併せて、大江匡房の『統本朝往生伝』にも見える花山朝聖代観が、花山天皇は後三条天皇を、惟成に匡房を重ねる作為を弄して後三条天皇聖代観と抱き合わせるかたちで作り出されたものだとすれば、後三条天皇の正統性を根拠づけるものとして編述された『大鏡』の歴史叙述の目的や志向と重なってくるが、そこに着眼して、匡房に代表される文人貴族のなかに潜流するかかる歴史のとらえ方と『大鏡』は同じ水脈に根差しているとする。花山院の逸話に使われる「王威」については、これまで明解を得なかった。花山院の奇矯なふるまいのひとつとして定着している、花山院と藤原隆家との「あらい事」について仰々しく「王威」が取りざたされていること理由を明らかにせんと試みているが、なお明解を得ていない。

第五章は、『大鏡』に見られる源氏繁栄の予言について考察する。『大鏡』にはいくつかの作品の根幹にかかわる予言記事がみられる。予言記事をいかに読むか、『大鏡』研究のひとつの課題である。本章も、『大鏡』の成立事情を明らかにする有力な材料として位置付けている。したがって、予言記事を吟味することによって、成立に関する確証を得ようとするのであるが、しかしながら、逆に想定する成立事情を踏まえなければ、予言記事の意味するところを読み取ることができないのである。とすれば、学位論文提出者がこれまでの積み重ねてきた読みの蓄積の中から作り上げた『大鏡』像との整合性を確認する作業からはじめ、ずれがあれば、そのずれを踏まえて自らのこれまでの読みを再吟味する、そういう手続きが望まれるのであるが、本章は、自らの想定する『大鏡』像に一方的に整合させるかたちで予言記事を読むことに終始している。『大鏡』が源氏の繁栄に触れるのは、道長の妻妾とともに源氏（宇多源氏・醍醐源氏）であることにかかわってであるが、のちに実際、繁栄するのは、藤原頼通を算とすることによって関係が始まった村上源氏であることのズレ、しかも村上源氏の繁栄は『大鏡』は言及していないことの意味について検討を加えるべきだろう。

第六章は、書きおろしの力作であるけれど、『大鏡』の成立と東宮、実仁親王とを関係づける必要があるのか、その点に関して、説得的な説明が必要である。師尹伝において教明親王の廢太子事件が分量的に肥大化していることに着目して、その理由を問い、東宮・実仁親王の政治的立場の弱さという『大鏡』の成立時の現実が投射されて、過去の記憶のなから同様の出来事が紡ぎだされ、それを系譜化する営みが『大鏡』の歴史叙述に内在化していると結論付けている。新たな読みの提示としては評価されるものの、実仁親王より、二十年以上の長きにわたり東宮の地位にあり、廢太子の可能性もあつた尊仁親王を想定するほうが、禊子内親王の繁栄の予言が実質的な意味を持つことをどのように乗り越えるのか、課題も残されている。

書きおろしの第二章と第六章を除いて、評価の高い「国語と国文学」や「中古文学」などの雑誌に投稿した論文に加筆したものを整理だて、学位申請論文としての体裁を整えている。掲載された雑誌からも外部の一定の評価を得ていることが思量される。以上の審査結果に鑑み、本審査委員会は、学位申請論文提出者、中瀬将志が博士（文学）の学位を授与されるに足る資格を有するものと判断した。

審査委員

区 分	職 名	氏 名	区 分	職 名	氏 名
主 査	教 授	福 長 進	副 査	教 授	市 澤 哲
副 査	教 授	田 中 康 二	副 査	教 授	樋 口 大 祐
副 査	都留文科大学 名誉教授	加 藤 静 子			